

各検査項目の説明

検査値にも個人差があり、さらにその日の体調や季節でも異なります。異常を指摘されたら、ひとつひとつのデータの変化にとらわれずに総合判定に従って下さい。

身体測定（↑：基準値上限より高値、↓：下限より低値を意味します）

項目	意味	代表的な疾患
BMI	肥満や痩せを判定するための体格指数で、BMI=22 が標準体重です。 BMI の求め方＝体重(kg)÷身長(m)÷身長(m)	↑肥満 ↓痩せ、低栄養
腹囲	おへその周囲を計測した値です。内臓脂肪の程度を推定するために測定します。 男性:85cm 以上、女性:90cm 以上の場合、メタボリックシンドロームの可能性があるとされています	↑メタボリックシンドローム、肥満
血圧	高くなると動脈硬化になる危険性があり、脳卒中や心臓病など重大な病気の原因になります。 運動や精神的緊張、過労などでも高くなります。	↑高血圧症、動脈硬化、腎疾患

胸部 X 線

胸部 X 線	肺・胸膜・心臓などの状態を調べます。	肺炎、気管支炎、肺気腫、心臓肥大など
--------	--------------------	--------------------

心電図

心電図	心臓が拍動する際に生じる弱い電流の変化から心臓の状態を読み取ります。	不整脈、狭心症・心筋梗塞・心臓肥大など
心拍数	心臓が 1 分間に拍動する回数を表示しています。45～85 回/分の範囲では問題はありません。	↑頻脈、↓徐脈

上部消化管

X 線	造影剤(バリウム)を内服して、食道・胃・十二指腸の形や粘膜の状態を調べます。		食道・胃・十二指腸炎や潰瘍、ポリープ、癌など
内視鏡	食道・胃・十二指腸の粘膜を直接観察します。組織を採取し、良性・悪性の診断を行います。		
胃の組織検査	グループ 1	正常組織および非腫瘍性病変	再検査が必要です 再検査もしくは経過観察が必要です 精密検査のために受診が必要です
	グループ 2	腫瘍性が非腫瘍性か判断が困難な病変	
	グループ 3	腺腫(良性腫瘍)	
	グループ 4	腫瘍と判定される病変のうち、悪性が強く疑われる病変	
	グループ 5	悪性の疑いと判定される病変	
ヘリコバクター・ピロリ IgG	(+)の場合は胃粘膜にピロリ菌が生息しており将来的な胃がん発症リスクが高いと判断されます。除菌療法の適応となりますので内科を受診して下さい。 (-)の場合でも抗体価が 3.0～9.9 では陰性高値とされます。稀にピロリ菌が生息することがあるため、精度の良い尿素呼気テストを内科で受けられることをお勧めします。		
ペプシノゲン 1	消化酵素のもととなるペプシノゲンの血中濃度を測定し、胃粘膜の老化(萎縮)を調べます。		↓萎縮性胃炎
ペプシノゲン 1/2 比	比率が基準値より低いとペプシノゲン判定陽性と判定されます。		
ペプシノゲン判定	将来的な胃癌のリスクを判定します。胃癌そのものを発見する胃癌検診ではありません。		陽性: 将来的な胃癌のリスクが高い

腹部超音波(エコー)

肝臓・胆嚢・胆管・膵臓・腎臓・脾臓などの異常の有無を超音波で調べます。病変のサイズについては、若干の測定誤差はあり得ます。 専門医が以前の所見と比較して有意な変化があると診断した場合には精密検査や受診をお勧めしています。	肝臓・胆嚢・胆管・膵臓・腎臓・脾臓などの各疾患
---	-------------------------

糞便検査・直腸診

便潜血反応	便中の微量の血液を調べる検査で、大腸癌のスクリーニングとして用いられます。大腸ポリープや癌と診断する検査ではありません。
直腸診	肛門を調べることで、痔核・直腸ポリープや前立腺肥大などの有無を調べます。

脂質

総コレステロール	全身の細胞を構成する主要成分で、各種のホルモンを作る材料にもなり、人間には不可欠な脂質の一つです。 高値が続くと動脈硬化を引き起こし、心疾患や脳卒中の引き金になります。	↑脂質異常症、動脈硬化 ↓栄養不良、甲状腺機能亢進症
中性脂肪	体の中で主にエネルギー源として使われます。過剰となると動脈硬化をはじめ、生活習慣病の原因となります。	↑脂質異常症、動脈硬化、糖尿病 ↓栄養不良、甲状腺機能亢進症
HDL コレステロール	いわゆる善玉コレステロールです。血管壁や細胞内から蓄積したコレステロールを取り除いて、動脈硬化を予防してくれます。	↑家族性高 HDL 血症、アルコール ↓動脈硬化
LDL コレステロール	いわゆる悪玉コレステロールです。高値が続くと動脈硬化を引き起こします。	↑脂質異常、動脈硬化

糖代謝

血糖	血液中のブドウ糖濃度のことです。糖尿病の診断指標です。	↑糖尿病 ↓低血糖
ヘモグロビン A1C	過去 1,2 ヶ月前の平均血糖値を反映する糖尿病の診断指標です。	↑糖尿病 ↓貧血
尿糖	尿中に排出されるブドウ糖のことです。通常は陰性です。	(+)糖尿病、腎性糖尿病

肝機能

総ビリルビン	赤血球中のヘモグロビンが分解されたもので、肝臓や胆道の異常で高値になります。	↑肝炎、肝硬変、胆石、胆道癌、体質性黄疸
総タンパク	血液中に含まれる蛋白質で、アルブミンとグロブリンから構成されています。	↑脱水症、栄養過多
アルブミン	肝臓で生成される蛋白質です。	↓低栄養、肝硬変、ネフローゼ症候群
GOT(AST)	肝臓・心筋・筋肉などの細胞に含まれている酵素です。これらの疾患で高値になります。	↑肝炎、心筋梗塞、筋炎
GPT(ALT)	主に肝細胞に含まれている酵素です。肝細胞が破壊されると血液中にもれると高値になります。	↑肝炎、胆道疾患
LD(LDH)	肝臓・腎臓・心筋・骨格筋・赤血球に多く含まれる酵素です。これらに障害が起こると高値になります。	↑肝炎、心筋梗塞、血液疾患、悪性腫瘍
ALP	肝臓・胆道・骨に多く含まれる酵素で、これらの障害で高値となります	↑肝・胆道疾患、骨疾患、
γ-GTP	肝疾患、胆道疾患で上昇します。アルコール常飲者や脂肪肝でも上昇します	↑アルコール性肝障害、脂肪肝、薬物性肝障害
アミラーゼ	デンプンを分解する酵素です。膵液と唾液の中に含まれます	↑膵炎、耳下腺や唾液腺の炎症、慢性腎不全
尿ウロビリノーゲン	尿中に出る胆汁の代謝物の一種です。	↑肝炎、黄疸、胆道閉塞
HBs 抗原	(+) B 型肝炎ウイルスに感染している可能性が高いです。内科で精密検査を受けて下さい。	
HBs 抗体	(+) B 型肝炎ウイルスワクチン接種歴のある方や以前感染し、治癒している方は陽性となります。受診の必要はありません。	
HCV 抗体	(+) C 型肝炎ウイルスに感染している可能性が高いです。受診や治療歴がなければ、内科で精密検査を受けて下さい。	

尿酸

尿酸	尿酸値が高い状態が続くと、血液中で結晶が形成され体内に沈着し、様々な病気が生じます	↑痛風、尿路結石、腎機能障害 ↓腎性低尿酸血症
----	---	----------------------------

血液一般

白球血数	血液中の成分の一種で免疫を司る白血球の数のことです。体質的に多い人、少ない人もいます。	↑感染症、白血病
赤球血数	血液中の酸素を全身組織に運搬する赤血球の数のことです。多血か貧血の判断材料になります。	↑多血症、脱水、 ↓貧血
血色素量 (ヘモグロビン)	赤血球の中の鉄と蛋白が結合した色素で、酸素の運搬役を果たします。 貧血の場合、貧血のタイプの判断材料となります。	↑多血症、脱水症 ↓貧血
ヘマトクリット	血液中に占める赤血球の体積の割合のことです。	
血小板数	血液中の成分の一種で、出血を止める役割がある血小板の数のことです。	↑多血症 ↓紫斑病、肝硬変、白血病、ウイルス感染

尿

尿沈渣	赤血球	(尿を遠心分離にかけ、成分を沈殿させて)尿中に赤血球・白血球・上皮細胞の数や細菌があるかなどを調べます。	↑腎炎、膀胱炎、結石、腫瘍
	白血球		↑尿路感染症
	上皮細胞		↑尿路感染症、腫瘍
	円柱	通常は陰性ですが、ガラス円柱は健康人でも少量みられることがあります。陽性の場合は、腎障害の部位・原因の鑑別に有用です。	↑腎疾患、ネフローゼ
尿一般	比重	尿の濃さを調べることで、腎臓の働きを把握します。	↑糖尿病　↓慢性腎炎、尿崩症
	蛋白	腎臓に異常があると(+)になりますが、生理中や運動でも(+)になることがあります。	(+)腎疾患、発熱
	潜血	腎臓・尿管・膀胱などの尿路に異常があると陽性になります。	(+)腎炎、尿路結石、尿路系腫瘍

免疫・血清

CRP	身体に生じている炎症の目安です。	↑各種感染症、膠原病
RF リウマチ因子	関節リウマチの方にみられる自己抗体です。それ以外の疾患でも陽性になることがあります。	↑慢性関節リウマチ、慢性肝疾患
ASLO	β連鎖球菌(溶連菌)の産生する毒素に対する抗体のことです。	↑溶連菌感染による咽頭炎・上気道炎・糸球体腎炎
TPHA	梅毒の診断のための検査です。梅毒が治癒していても陽性を示します。また結核や膠原病でも陽性を示すことがあります。	(+)梅毒

聴力:1000Hz(低音域)と 4000Hz(高音域)の音が小さくても聞こえるか調べます。1000Hz・4000Hzとも 30dB 以下であれば、異常はありません。dB とは音圧の単位です。また「所見なし」とは聞こえたという意味で、「所見あり」とは聞こえていないという意味です。加齢とともに 4000Hz の聴力は低下しますので、高齢の方は 40dB 程度聞こえれば問題ないと判定されることもあります

	基準範囲	要注意	異常
1000Hz	30dB 以下	35dB	40dB 以上
4000Hz	30dB 以下	35dB	40dB 以上

眼科

眼圧	眼球の硬さを測定して、緑内障の有無を調べます。		↑緑内障
眼底	網膜上の血管、視神経などを撮影した写真により、動脈硬化・高血圧・糖尿病などの疾患の有無を調べます。		高血圧、動脈硬化、糖尿病などによる網膜症、黄斑変性、緑内障、白内障など
	KW 分類	高血圧性変化・動脈硬化性変化の程度を表します(0～Ⅳ)	
	Scheie-H 分類	高血圧性変化の程度を表します(0～4)	
	Scheie-S 分類	動脈硬化性変化の程度を表します(0～4)	

子宮頸がん:内診・婦人科超音波検査(オプション)では、子宮や卵巣の状態を確認します。子宮頸がん細胞診検査では、ベセスダ分類に従って診断します。NILM 以外は精密検査が必要です。Class 分類は現在臨床では使用されないため、記載しておりません。

ベセスダ分類	推定される病理診断	判定	ベセスダ分類	推定される病変	判定
NILM	異常なし	正常範囲	SCC	扁平上皮癌と考えられる	精密検査のために 婦人科受診が必要です
ASC-US	軽度の扁平上皮内病変の疑い	精密検査のために 婦人科受診が必要です	AGC	腺異形成、腺病変疑い	
ASC-H	高度の扁平上皮内病変の疑い		AIS	上皮内腺癌	
LSIL	HPV 感染や軽度異形成の可能性がある		Adenocarcinoma	腺癌	
HSIL	中程度異形成、高度異形成、上皮内癌と考えられる		Other	その他の悪性腫瘍	

* HPV とは：ヒトパピロマウイルスというウイルスです。HPV には 100 以上のタイプがあり、そのうちハイリスク HPV というものは子宮頸がんの原因になると考えられています。
* 異形成とは：がんではないものの、細胞成熟過程の乱れと核の異常を示す病変のことです。

乳がん検査

乳房 X 線検査 (マンモグラフィー)		乳がん検診として、乳房内の腫瘍や石灰化の有無などを調べます。所見を 5 段階に判定し、精密検査が必要か診断します	
判 基 準	カテゴリー1	異常を認めない	正常範囲
	カテゴリー2	良性の所見。精密検査や治療の必要なし	
	カテゴリー3	良性の可能性が高いが、悪性も否定できない。 念のために精密検査が必要です	精密検査のため 乳腺外科受診が必要です
	カテゴリー4	悪性の疑いが濃厚な所見	
	カテゴリー5	悪性と判定される所見	
乳腺超音波(エコー)		乳腺の病変やリンパ節の腫れの有無を調べます。癌以外の良性の所見も見つかりやすく、それに対して精密検査が必要となる場合もあります	
触診		しこりやリンパ節の腫れの有無を調べます	

腫瘍マーカー: 癌のみならず良性疾患でも高値となる場合もありますが、基準値を超えていれば精密検査は必要です

PSA	前立腺癌を早期発見するためのマーカーです。
CEA	大腸、胃、膵臓、肝臓、胆道などの消化器癌をはじめ肺、乳房などの癌でも上昇します。
AFP	原発性肝癌の腫瘍マーカーですが、肝炎や肝硬変でも上昇することがあります。
CA19-9	膵臓癌、胆嚢・胆管癌で高値となりますが、胃、気管支、前立腺、大腸癌の癌でも上昇します。
CA125	卵巣、肺、膵臓癌などで高値となります。子宮内膜症や骨盤内炎症でも上昇することがあります。